
IS [インフィニットストラトス・古き鉄の使い手]

晃燈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS (インフィニットストラトス・古き鉄の使い手)

【Nコード】

N6145U

【作者名】

晃燈

【あらすじ】

主人公はスパロボの「古い鉄」と「白騎士」で戦うあの二人の息子で
女の子に（と男が一人）に囲まれながら新しい仲間と共に戦い続ける。

アインスト編（前書き）

初めてな上に文才がありません、どうか温かい目で読んでください

アインスト編

人は人、機械は機械……そんな中で人は戦い
殺し傷つけあう……機械は武器……武器は使い手を選ば
ない。

兵器が兵器でしかないように……。

少年は戦う……。

別の世界で……次元の先で家族と離れ離れになろうとも。

新たな世界で愛しい人たちそして友のために駆け抜ける父から受け
継いだ強さと共に……母からもらった思いと共に……。

そして俺はもうひとつ大事なものを受け継いだ……それは父
の相棒にして愛機……そして戦友でもある、あまたの戦場を駆け

抜けた父

キヨウスケの相棒〔アルトアイゼン・リーゼ〕はISとなり今度は俺。

ソウスケと共に新たな戦場を駆け抜ける父が母エクセレンを助け出したように守ろう……。

俺の……いや……【俺たちの大切なひと達を】……。

アインスト編（後書き）

とりあえず次は長くします。

設定集（前書き）

とりあえず主人公の設定です跡から増える予定です

設定集

名前【ソウスケ・ナンブ】

(IS時・南部想助)

・16

スパロボOGの【エクセレン・ブラウニング】【キョウスケ・ナンブ】の息子

下に双子の妹【アルフィミィ】【レモン】と言う名の妹がいる。

別の(インフィニットストラトス)世界に転移したときにアルトアイゼン・リーゼは

なぜかIS化した後アルトアイゼンの武装に戻っていた。

容姿・キョウスケ譲りの茶色い髪にエクセレン譲りの蒼い瞳を持ち髪形はキョウスケの髪を少し下ろしたような形で顔もどちらかと言えば

キョウスケ似(エクセレン曰く自分に似てほしかったらしい)

性格・どちらかと言えばキョウスケよりだが、エクセレンの子供だけあって

たまにボケたりからかったりもする、小さい頃から二人を見て来たので

戦闘中二人の掛け声を叫ぶことがある、特に好きなのが

【ジョーカー・・・切らせてもらう!】だ。

だがエクセレンは(子供達が)キョウスケのように博打好きにならないか心配している。

専用IS【アルトアイゼン】《ALTEISEN＝「古い鉄」》

憧れの二人の後を追いATXチーム配属になって一年後に父キョウスケから

譲りうけた《PT》。「可能な限り遠くの敵機の懐に飛び込み必殺の一撃を打ち込んだ後、

急速離脱」をコンセプトに作られた機体。

ISになってもそれは変わらず、その数々の【武装・厚い装甲・重量】故にISになって多少飛べるが

機動力は全IS中「下位」にあたる、だが【突撃・正面突破】時のアルトのスピードは全IS中

トップクラスにあたる、しかも装甲にはビームコートも装備されている。

武装

スプリットミサイル

拡散型の中射程ミサイル。

ヒートホーン(HeatHorn)

通常頭部に装備されていたが、IS型の【アルト】には実体剣として装備されている。

3連マシンキャノン(Autocannon)

左腕に装備された実体弾の機関砲キョウスケは射撃を苦手としていたがソウスケはエクセレン譲りの射撃能力で遠距離からでも敵機を狙い打つ。

リボリング・ステーク (Heary Claymore)

キョウスケが主に使用していた武装、ステークのリボルバー内の炸薬を

使い切ると炸薬を装填しなければならぬが威力は抜群。

(バリアー無効化)

スクエア・クレイモア

両肩に装備されている特殊武器、外見的にも重量バランスの点でも被弾、誘爆の危険性が高い武器、だが分厚い装甲とISのシールドで搭乗者への危険性は減っている。

必殺技

「切り札」 (Trump Card)

本機の全部武装を全て叩き込む
ソウスケは最後に「ジョーカー・・・切らせて
もらった・・・」と言うのが口癖
(とゆうか気に入っている)

ランページ・ゴースト (Rampage Ghost)

(I) 一夏

(H) 篝

(C) セシリア

(R) 鈴

(R2) ラウラ

(S) シャルロット

これはソウスケがアレンジしたISメンバーとのコンビネーション
アーツ。

設定集（後書き）

とまあこんなかんじです？どうですか。

プロローグ（前書き）

始まり始まる物語！・・・・・・・・なんのこっちゃ？（お前がゆうな）

プロローグ

空は晴れ．．．とある教室。

「え〜．．．今日は皆さんにビックリなお知らせがあります．．．
実は私も驚いてます．．．」

教室の生徒達がざわめく中話を進めるこの教室の副担任『山田真耶』
初めて見たときは、えっ子供しっわいと思ったほどだ。

「じつはこのクラスに転校生が来ます．．．」

．．．．．

俺の名前は『ソウスケ・ナンブ』こちらでは『南部想助』と言うことになっていて、
ちなみに名前の意味は「想い助けるもの」と書いて想助と言う・・・
今は関係ないな。

「まったく・・・あいつらは何を騒いでいる」

俺の隣にいるこの人は織斑千冬・・・（ギロツ！）・・・織斑先生・・・このクラスの担任らしい？。

「南部、私が呼ぶまでここで待っている・・・いいな」

「了解」

そう言うと教室の中に入って行った・・・『バシューンツ！』と
ゆう鋭い音が

聞こえたが・・・幻聴だろう・・・いやっ！きっとそうだ！
！。

・・・。

「はぁ・・・なぜこうなった・・・」

物語の始まりは今から一週間前。

ここは伝説？の部隊ATXチームが属する大型艦ハガネ内部、俺は隊長である父『キヨウスケ・ナンブ』に呼び出されていた……。

「父さんが部隊内で呼び出すなんて珍しいな……」

何か仕出かしただろうか？……覚えがない！

この部隊に来てから早一年……憧れの父さん母さんの後を追う努力の末この部隊に所属したほかの部隊とは異なりこの部隊はすぐ……

いや……かなりフレンドリーだ、ご飯に誘われたり（アラドさんゼオラさん）

スリーサイズを聞かれたり……母さんの（タスクさん）後ゼンガーさんに（初めて会った時はめっちゃ怖かった）剣の指導を頼んだら快く引き受けてくれたりと、部隊と言うよりか家族に近い。

「一年か・・・長いようで短かったな・・・」

そのように過去を振り返っていると父さんの姿が見えた。

「あつ・・・父さ・・・隊長」

「ソウスケ来たか・・・後この部隊では普通に呼べばいい」

この人が俺の父で『キヨウスケ・ナンブ』、愛機アルトアイゼン・リーゼを駆るエースパイロット。

「じゃあ父さん、話つてなに？俺なんかした？」

「いや・・・今日はお前に渡す物がある」

「渡すもの？」

「ついてこい・・・」

そう言つて先頭を歩く父さんの後を追ひ、たどり着いたのは格納庫。

「おつ来た来た」

「はやかったですね」

そこで待っていたのはアラドさんとゼオラさん。

「またせたな二人とも」

「そこまで待つてないっすけど」

「それに今日は大事な日ですから」

大事な日………はて？。

「ソウスケ……お前忘れてるな」

「……？」

父さんはなぜか「ハア」とため息を付きながら「そうゆう所はアイツ似だな」と言っていた。

「今日は特別な日……だったか？」

ははは……とアラドさん達に苦笑いされた。

「なら教えてやるよ、今日は……」

『ソウちゃんの誕生日よ！』

バンツバンツバンツ！！！！

『『『！?!?!』』』』

いきなり大量のクラッカーを（後で艦長に怒られた）もって出てきたのは俺の母さん、

『エクセレン・ブラウニング』……なにをしてるんだこの人は…。

「てっ……俺の誕生日……ああっ」

「本気で忘れてたのね、ソウちゃん……」

まあこの部隊に入隊してから色々忙しかったし。

「で……誕生日でなんで格納庫」

「すぐわかる……付いて来い」

言われてまた後を追うとそこには……。

……。

「アルトアイゼン……」

格納庫ハンガーには父さんの愛機であり戦友でもある機体……アルトアイゼン・リーゼが収納されていた。

「アルトを……お前に託す」

「なっ!?!」

その言葉に俺は驚愕する、俺にアルトを……。

「何を言ってるんだ父さん！アルトは父さんの大事な相棒じゃない
かつ、

何で俺なんかにッ！！」

「お前だからだ」

「！」

父さんはしつかりと俺の目を見ながらそういった……混乱して
いる俺の両肩に
母さんは手を置く。

「キョウスケはね、ソウちゃんに期待してんのよw」

「えっ？」

「あなたはこの部隊に入隊してから成長したわ……力だけじゃな
く心もね」

「それにお前は初任務であのゲシュペンストを乗りこなした」

「アレはびっくりしたなw」

なんせ私たちの息子だからねッ！と、胸を張っている母さんを見
して父さんは

話を進める、母さんが「無視するなっ」と言ってるがガン無視。

「あれはお前が機体を信頼しているからこそ出来た芸当だ」

確かに俺は初任務でゲシユペンストに搭乗し任務を最速で達成した・
・、アレは

ゲシユペンストがアルトやヴァイスリッターの元型であるを知っていたから・・・・確かに俺はゲシユペンストを信頼していたがアレはただ父さんと母さんに一歩近ずけた用な気がして、気分が向上していただけなのだ。

「だから俺にアルトをもらう資格は・・・」

「俺はお前を信頼している」

「！」

「私も・・・信頼してるわ・・・だって」

お前は俺たちの息子だから
貴方は私たちの息子だから

「だからこそ・・・・・・お前にアルトを託す、俺が信頼を置いたこのアルトアイゼンを」

「誕生日おめでとうソウちゃんWおっきなプレゼントになっちゃったね」

俺はその時二人を見て・・・二人の言葉を聴いて、多分泣いていたんだと思う

そしてこの時俺は自分に・・・自分の「心」に刻み込んだ。

俺は父さんと母さんを超えて俺が信頼する人達を・・・家族を守ると。

.....。

あの誕生日から一ヶ月、俺はアルトに乗りとある任務に付いていた。

ゴオオオオオオオオオッ！

と俺は陸で低空飛行をしながらこの地域一体を見渡していた。

『ナンブ少尉、状況の報告を』

「異常なし・・・異様なエネルギー反応もありません」

今回の任務はこの地域一体で妙なエネルギー体を観測、それを調査せよとの事。

『そうか・・・すまないなナンブ無駄足を踏ませた、直ちに帰還してくれ』

『了解、直ちに帰k・(ビーツ!ビーツ!!)!?!?』

帰還しようとしたと単に響く警告音。

『どうしたナンブツ!?!?』

「わかりません・・・レーダーには何もっ(ガクンッ)ッ!」

突然機体が大きく揺れ、何かに引っ張られるかのように後退する。

「くっ!」

ブースト、バーニアを全開にするが引かれる力はどんどん増して行く・・・そして。

「なっ!?!?」

『ナンブ！応答しろ！！ナンブ・・・ナンブ！！！！』

『アルトアイゼン・・・ロスト・・・しました』

多分この時俺の中の物語が進みだしたんだと思う・・・。

【IS学園】

．．．い．．．！

誰かの声がする．．．誰だ？．．．。

だい．．．ぶか？．．．今．．．室に。

重い目を少しだけ開く……最後に見たのは。

「しっかりしろ、今保健室に連れて行く！」

スーツを着た黒髪の女性だった。

プロローグ（後書き）

コシツ痛ツた！！創造以上だ！！（あとがき関係ね！！）

第一話・強制はよくないと思った今日この頃（前書き）

なんか主人公の性格が少し子供ッぽすぎかな？

第一話：強制はよくないと思った今日この頃

気を失ってからどれだけの時間がたったのだろうか？、思い目を何とか開けると

見覚えの無い部屋・・・とゆうより医務室か？

「やっと目が覚めたか」

不意に声をかけられ首だけをうごかし声の主を探すと。

「だれだ？」

「助けた相手に第一声がそれか・・・」

ハアと深いため息をつかれてしまった。

「いや・・・なんとゆうか・・・スイマセン！」

「応謝っておく。」

「とりあえず自己紹介といこうか、私は織斑千冬だ・・・お前は？」

「ああ、俺はソウスケ・ナンブです」

「ソウスケ・ナンブ？・・・お前はどこの出身だ？」

「それは・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「今の話・・・私を馬鹿にしている訳ではないのだな？」

「それをゆうならこちらもだ・・・ISってなんだ？PTどころかテスラ・ドライブの技術すら無いなんて・・・」

「お前の言うスペースコロニーなども存在しないからな」

「ッ！そうだ！！俺の近くに赤くて巨大な機体を見なかったか！長い角が付いた！！」

千冬さんは顎に手を当て考え込む・・・。

「いや・・・私が見つけたのはお前だけだ、近くにそのような物は無かった」

「そんな・・・」

アルトは父さんから譲り受けた大事な相棒なのに・・・。

「とじろで・・・」

「？」

「お前は本当にISを知らないのか？」

「ああ・・・聞いたことも無い」

「ならお前が腕につけているソレは何だ？」

「俺の腕に？」

自分の右腕に視線を下ろすと確かにあった・・・赤と主に黒と白でカラーリングされた腕輪が・・・まるでアルトのような。

「いや・・・覚えが無い、気を失う前はつけていなかったし・・・」

「そうか・・・」

千冬さんは少し考え込み。

「ナンブ、もう動けるか？」

「えっ？ああ、もうなんともない」

「ならば付いて来い」

「は？」

それから半場強制的につれてこられたのはとある個室……。

「あのおく……織斑せんせ?」

「なんですか?山田先生」

「いえ……あのお……彼は?」

「……」

「新しい転入生だ」

「ええっ!?!」

「はあっ!?!」

転入生!なにを言ってるんだこの人は!!。

「いやっ千冬さ……!」

「IS量産機、ラファール・リヴァイブだ……ナンブ、これに触れてみる」

「え……」

そこには妙な……と言えはいいのだろうか?不思議な機体がある場所でずっしりと待機していた。

「いやっ……しかし……」

「やれ・・・」

「はいつ・・・」

泣く泣く触れてみると・・・。

「ッ!」

当たり前のようにただ触れただけだった・・・ソレだけで膨大な情報が頭の中に流れ込んでくる・・・コレハ・・・。

「フツ・・・やはりな」

「えっ・・・えええ!??」

なにを驚いているんだ?。

「お前はたった今ISを発動させた・・・よって!」

IS学園の生徒になってもらう!!!。

「は……はっあああああ!!??」
「え……えっえええええ!!??」

ついさつき転入生って言ったじゃないですかあああああ!!?!、
と山田先生の悲痛な叫び声が此処……IS学園に響き渡った。
……。

……

と……ゆう感じで事が運び、俺「ソウスケ・ナンブ」改め「南部想助」は（こっちの世界ではこう名乗れと強制された）今IS学園の一年一組の教室の前で待たされている……。

バシンッ!!!。

「あつ……また鳴った」

ガラガラ……。

「南部、入れ」

やっとか……。

「了解です、千冬さ……」

「……（無言の睨み）」

……。

「織斑先生……」

「ようじい」

【一夏視点】

山田先生の話だと今日転入生が来るらしい……また女の子だろ
うか。

「はぁ・・・」

そう思うと気が重くなり自然とため息が出た。

バシンッ！！

「テッエ！！」

するといきなり頭をたたかれ上を向くと。

「ちふ・・・織斑先生；」

「何をぼー・・・っとしている話を聞いているのか？」

「スイマセン・・・キイテマセンデシタ」

スパッン！！！！。

今度はきつめに叩かれた・・・今ので脳細胞何個死んだらうか。

「聞いている通り今日このクラスに転入生がくる、行き成りの転入で混乱しているだらうから面倒を見てやれ・・・わかつたか！」

クラスの女子達は（箸、セシリアと俺を除く）『ハア~~~~~イ！
！』と元気よく返事をしていた・・・さて、どんな子が来るのか；。

「では……（ガラガラ）南部、入れ」

「了解です、千冬さ……」

ギロツ！。

「織斑先生……」

「よろしい」

その妙なやり取りの後生徒が入ってきた……。

【想助視点】

「失礼します」

扉を潜り中に入ると。

「……」

女子達（事前にIS学園には織斑先生の弟以外男が居ないと聞かさ

「!?!?!?!?!」

その超振動並の爆発的音量に気を失いかけつつも何とか持ちこたえる……ガラスが震えてたよ。

「男子だ!?!?!」

「織斑君とは逆でクールっぽい!?!」

ぽい?。

「こつちみてー!?!?!?!?!」

「私とラブロードを(愛の道)を駆け抜けませんか!?!」

何いってんの?。

「みつ……みなさああああん! ; 落ち着いて……落ち着いて
くださああああい!?!?!」

とっ……とりあえず、SHRをはじめますから質問はその後にして
くださああああい!?!?!?! (泣)

そんなこんなで俺の……いや【俺達】の学園生活が始まった。

「静かにせんかつ!!」

バシッ!!!!

「何で俺っ!!」

哀れ織斑……。

第一話・強制はよくないと思った今日この頃（後書き）

書いてみて少しずつ主人公の性格を修正して行こうと思った今日の頃です。

仲が良いのか悪いのか。(前書き)

宗助ちょっとホームシック。

仲が良いのか悪いのか。

俺こと【ソウスケ・ナンブ】．．．いや．．．今は【南部宗助】か、別の世界に転移してしまうとゆう奇異な事件から少し経って、この生活にも慣れてきた。

住めば都とは良く言った物だと思う．．．．．母さん達は今ど
うしてるだろうか？、自分の事を心配してないだろうかと日々思
う．．．．何とか帰る方法を探さないと。

「．．．部．．．」

しかし別の世界に転移するくらいだ．．．．何か原因があるはず
．．．。

「お．．．南．．．」

まあそんな簡単に帰る方法が見つかる分けが無いのだから当分はこ
の世界で「勉強？」に励みながら探して．．．。

『南部ツ！！！』

ズバコンツ！！！！。

「ぐぐあ！？」

そのように考え事をしていたら出席簿でおもツい．．．．きり！

！・・・しばかれた。

「訓練中に考え事か？・・・いいご身分だな南部」

と、おもいつきり睨んで来るのが俺のクラスの担任、織斑先生。

「スイマセンでした・・・」

「まったく」

先生にため息を疲れた際に織斑（弟）が大丈夫か？と声をかけてくれた事にちよつと感動した今日この頃。

「では南部が自分の世界から帰ってきたので訓練を再開する・・・織斑、オルコット、ISを展開しろ」

ひどいなこの人・・・つと話を戻そう、織斑先生がそう言う二人はISを展開する・・・織斑（弟）は手間取っているようだが。

「早くしろ織斑。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

いや、行き成りは無理だろ・・・つとツツコミたかったが出席簿アタックが怖いのでやめておく・・・。

「・・・・・・・・・・」

オルコットと織斑がISを展開すると同時にふと自分の・・・い

や自分の腕にはめられた腕輪を見る。

「こいつもISらしいが・・・」

俺の腕に付いたこのISは今だ起動しない・・・呼べば来るらしいのだが何時まで待っても来ないのだ、調べてもらったが何かロックのような物がかけられているらしい。

「いまのところはリヴァイブを使っているが」

やはりこの謎のISを起動してみたいとゆう好奇心・・・だろうか？、わからないがコイツを起動しなければならぬ・・・そんな気がしてならないのだ。

そんなことを考えている間に二人は上へと上昇していく。

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

確かに出力やスペックでは【白式】のほうが上だろうがソレを引き出すのはいつでも何時の時代も操縦者の技術が必要不可欠。

「動かし始めて日の浅い織斑には酷だと思つが・・・」

「何か言つたか・・・？」

「イエ・・・ナニモ」

鬼教官・・・もとの世界にいるカイさんを思い出す、自分も訓練生時代にしごかれたもんだ・・・懐かしい。

「どうした？南部」

「ん？なんだ篠ノ野」

「口元が少し緩んでるぞ」

「……………本気と書いてマジでか。」

「それはさておき……………」

篠ノ野が上空を睨みつける。

「……………」

つられて上を見ると、織斑とオルコットがなにやら話している……………
・何をはなしてるん……………。

「しつ……………篠ノ野さん！」

「へ？」

すると篠ノ野が山田先生からインカムを奪い叫ぶ。

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りて来い！」

と……………叫ぶもんだから何してるんだこの子はと思ったり、山田先生はインカム奪われていまだにおたおたしてるし……………この人ホントに子供みたいな動き方するよな。

そう思っていた矢先に織斑先生から指示がでる。

「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやってみせる。目標は地表から十センチだ」

するとオルコットは降下したのち綺麗に地表十センチで静止、流石代表候補生と言った所か。

「次は織斑か……」

と上を見上げ……。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けて
どうする」

「……………すみません」

……………結果は言わずもながら地表に激突。そして地面にクレータ
ーを作ると言った結果が出た……………上を向いた途端目の前で爆
発音がしたから驚いた。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

ああ教えていたな、俺もその場にいたから覚えている……………だが
アレは。

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、という感じだ』

『ずがーん、という具合だ』

なるほど、あれは操縦方法を教えていたのか……………冗談だとお
もってた。

そんな事を思いながら二人同時に篠ノ野を見る。

「貴様ら、何か失礼なことを考えているだろう」

バレてるし。

とまあこんな感じで授業はすすむ……………篠ノ野とオルコットが織斑
の事できゃあぎゃあ騒いでたが（二人は織斑に好意を抱いているこ
とにはきずいている）この二人は恥ずかしくないのだろうか？今は

授業中だぞ？・・・・・・・・俺も授業中に考え事してたけど。

それにしてもこの三人とは仲がよくなったものだ。織斑とはルームメイトになり（その際篠ノ野が俺を睨んでいたが）、オルコットには操縦方法を色々教えてもらった、その際に訓練所でISを借りて（リヴァイブ）軽く操縦して見せたら啞然とされた・・・普通に動かしただけなんだが・・・。

篠ノ野とは道場でよく打ち合いをする師匠センガから教わった技術を磨くのを手伝ってもらった、そのときに關心されたのは記憶に新しい。

「・・・・・・・・」

自然と口元が緩む・・・・・・・・自分はなんだかんだで今の生活を楽しんでいるんだなと思う・・・・。

「時間だな。」

そんなこんなで授業の終了の合図。

「今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

そう言われうなだれる織斑、手伝ってもらおうと篠ノ野とオルコットを探すが二人はすでにいない。ワイワイと戻っていく生徒達を見ながらまたうなだれる織斑。

「・・・・・・・・ハア」

ポンツと織斑の肩に手をおく。

「早く片付けるぞ織斑」

「助かるツ!!!」

助かった!という顔をした織斑がふと口を開く。

「なあ想助」

「ん?」

「ソレやめないか?」

「何の事だ?」

「いやルームメイトなんだしさ、名前で呼び合おうぜ……っなるほどそういう事か。」

「いいのか?」

「いいのかって・同じクラスの仲間なんだしさ」

「仲間か……」

……。

「一夏」

「お？」

「これでいいか？」

一夏はニカツと人懐っこい笑みを見せた。

仲間か……この世界ではそお呼べる人はいなかったな。

「一夏、早く終わらせて食堂に行くぞ……腹がへった」

「悪い・急ぐか」

急いで穴を埋め、食堂へ向かうと篠ノ野が待っていて一夏を名前で呼んでいるのを聞いて驚いていた、そしてなぜか自分も名前で呼べと迫られた。

「私達は友だ……名前で呼び合うのは当たり前、違うか？」

友か……。

「でしたら私もセシリアとおよびくださいな」

……何時からいた、一夏と箒も驚いてるぞ。

「先ほどからいました」

突っ込まれた。

「想助さんはどこか私達に遠慮しているようですから」

「そろそろ気軽に話してくれていいんだぜ？想助」

気軽にか……。

「了解した今からそうする」

「あまり変わっていないが……」

ソレは俺も思う、それよりも。

「一夏」

「ん？」

「箒」

「何だ？」

「セシリア」

「ハイ」

心をこめて友人達にこの言葉を送ろう。

「改めてこれからよろしく、それからありがとう」

三人は少しの間きよとん・としていたがすぐに笑顔になり。

「よろしくな！」

「こちらこそな」

「おねがいますわw」

「こちらの世界での生活も……………」。

悪くない。

仲が良いのか悪いのか。(後書き)

名前を呼んでからが友達だ……。どっかで聞いたような？。

またにも……修羅場……マジ？(前書き)

鈴登場……どっになることやら。

まさに……修羅場……マジ？

「とっ……いうわけです！」

なにが？。

「織斑くんクラス代表決定おめでとう！。そして二人目の男子、想助君いらっしや〜い！」

ぱん、ぱんぱーん。と乱射されるクラッカーの紙テープをうけうなだれる一夏を見ながら俺はクラス代表とこの騒ぎは何なのか近くに
いるクラスメイトに聞く。

「布仏、ちょっと聞きたい事が……」

「なに〜？そーちゃん」

「その愛称で決定なんだな俺は……」

彼女の名前は布仏本音、（皆からは愛称はのほほんさん……らしい）その愛称道理にいつもどこかのほほんとした娘である。

「も〜かたいな〜。のほほんさんでいいよ〜そーちゃん」

「了解した、じゃあのほほんさん。この集まりはいつたいなんだ？
一夏のクラス代表がなんだの言ってるが」

「あ〜〜そういえばそーちゃんが来る前だったね〜、おりむ〜が
クラス代表になったの」

説明によると（まったり説明されたので時間がかかった）俺が来る少し前にクラス代表を決めるための一夏とセシリアの、一騎打ち？・・・があつたらしい。結果はギリギリ、セシリアの勝利に終わったがセシリアが代表を辞退したらしい、それで夕食後の自由時間に一夏のクラス代表決定と俺の歓迎会を使用ということらしい。

「なるほど・・・そういえば小耳に挟んだんだが、クラス代表はそのクラス同士の対抗戦があるらしいな？」

「そうだよ～～よくしってるね～～えらいえらい」

そこで何故あたまを撫でる、というか俺いま小耳に挟んだって言ったよな？。

「それにしても」

必要以上に頭を撫でてくる、のほんさんの手をどかし（そーちゃんのおかげず）（なにがだ）一夏達の方に向かう。

そこでなにやら不機嫌な筈にしゃべりかける。

「どうした筈？一夏は・・・聞くまでもないか」

「ふんっ」

一夏はというとなにやら知らないクラスの娘に色々質問されている。

「二年の新聞部副部长さんらしい・・・」

「なるほどな」

それで皆が一夏を囲んで話を聞いている訳か……んっ？。

「あっ、いたいた想助君こっちこっち」

「えっ……あ」

クラスの娘に腕を引かれて一夏とセシリアの下につれてこられた……一夏、そこで助かった、て顔するな。

「さて君が謎の（謎の？）転入生、南部想助くんだね私は……」

「新聞部の部長さん」

「おや？話が早い、ハイこれ名詞」

「あっ……どうも」

名詞を受け取ると同時にボイスレコーダーをズズイッ！と近づけられた。

「では南部くん！此処は転入生としてかっこいい決め台詞をどうぞ！！」

転入生と決め台詞はまったく関係ないだろ。

「あの……転入生と決め台詞は関係な……」

「どうぞぞッ！……！」

「さあ！私と付き合おうか想助くん……ラブのほづでー!」
大丈夫か？特に頭のほづ。

「じゃあ最後に」

この状況無視かっ!!

「専用機もちの二人の写真をとらしてもらいまーす、さあ二人とも
並んでならんで」

写真を撮るために一夏とセシリアを並ばせる薰子さん……あ
つ箒が睨んでる。

「それじゃいつくよー135×51÷24は？」

なんだよそれは……とあきれていると。

「そーちゃん、こっちこっち」

「え」

なぜかのほほんさんに腕を引かれて一夏達の方へ。

「え？えつと……2？」

「ぶー、74・375でしたー」

ほんとこの人は何がしたいと思った矢先に……パシャツ！とカメラが鳴る。

「何で全員入ってるんだ？」

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

二人のツーショットを取るはずが何故か（俺や箒も含め）全員集合写真になってしまった、しかもセシリアはご立腹。

「なんで俺まで？」

「え〜〜〜写真はみんなで撮るものだよ〜〜〜」

………。

「そっいつもんか？」

それはともかく、この一夏と俺の祝い事は夜の十時まで続いた……はつきり言ってだいぶつかれたぞ……精神的に。

次の日。

此処の学食は最高だとココに記しておく、それは何故かって・・・
不不不（字が違う）それはだな、なんと！IS学園の学食は和、洋、
中、何でもござれな学食なのだ・・・はつきり言ってどんだけ
かけね掛けてんだっておれは言いたいなまったく！！。

・・・・・・・・。。。

すまない、少しキャラが壊れてしまった・・・現実逃避するの
はやめよう・・・何故現実逃避しているのか？・・・ソレは
だな。

「一夏！！」

「一夏さん!!」

「そろそろどういう関係か説明していただきたいですわ!!」

「そうだぞ!まさか付き合ってるなんてことはないだろうな!？」

何この二人は【自分は織斑くんに惚れています】的な発言を堂々とできるんだろうか・・・愛ゆえにか?・・・自分で言つて恥ずかしいな。

「(ズゾゾ)」

「(鳳・鈴音だったか・・・当の本人は気にせずラーメン食べてるし)」

しかも彼女は一夏のセカンド幼馴染らしい・・・ちなみにファーストは等。

「ところで一夏・・・」

「ん?」

鈴音とセシリアがぎゃあぎゃあと(主にセシリアが)叫んでいるのを無視して少しさめてしまった飯にあり付いていると、今度は鈴音の方から一夏に質問してきた。

「コイツだれ?しかも男だし」

初対面でコイツ呼ばわりはすごいなこの子・・・まあセシリアとの騒動の中、別の国には興味ないとかいつていたからな、不思議ではないか。

「ああ、紹介するよ、想助って言って俺と同じく世界で二人目の男のIS操縦者だ」

「よろしくたのむ、鈴音」

そういつて握手をするために手をのばす、素直に受け取ってくれたあたり俺は別段敵視されていないらしい。

「よろしく、あつ別に一夏みたいに『鈴』でも良いよ」

「そうか？じゃあ鈴これから色々よろしく」

そう……ここまではよかった、この後に何故かISと訓練を使用という事になり俺は部屋に戻ろうとしたが一夏に。

「（頼むこのまま一人で訓練に行ったら身の危険を感じるんだ、一
緒にきてくれ）」

「（……………）」

そのまま断りきれずに訓練に付き合わされることになった、今度からは断ることが出来る人間になろうとおもった今日この頃です……
・・・続きはまた次回。

「次回ってなんだよ…」

まさに・・・修羅場・・・マジ？（後書き）

突っ込んだら負けです。

自分の覚悟・自分の思い（前書き）

苦渋の決断・・・あなたにはありましたか？

自分の覚悟・自分の思い

俺は今一夏と共に連携技「コンビネーションアーツ」の連携をくみ上げていた。一夏は接近戦が主なため俺が使っているリヴァイブでは連携が取りづらい。

「ふむ……どうしたものか」

俺はどちらかと言うと接近戦の方が得意だ、リヴァイブは銃火器が主なためあまり向いていない……。打鉄でも使ってみるか。

「それにしてもすまないな一夏」

「ん？」

「セシリアと篝の訓練が終わった後に誘ってしまって」

すると一夏は笑いながらこういう。

「いって別にw気にするなよ」

「む？…そうか、なら今度なにかおごろう」

「おっ、いいのが……。じゃあ篝やセシリア、鈴も誘って皆でどこか行かw」

「そうだな……。たまにはいいかもな」

「だろw」

そんな感じで一夏と連携を考えながら他愛も無い話をしていると日が暮れてきた。

「もうこんな時間か、一夏！そろそろもどるか」

「わかった、そうだ想助」

「今日先にシャワー使わせてもらってもいいか」

「ああ、別に構わな・・・」

構わないといい終える前にバシュツとスライドドアが開き鈴が入ってきた。

「おつかれさま。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね」

「サンキユ。あー、生き返る・・・」

そう言っつて鈴は一夏にタオルとスポーツドリンクをわたすと今度はこちらに向かってくる。

「はいつ。想助も」

「いいのか？」

「ついでだからね」

「そうか・・・ありがとう」

鈴にお礼を言うとニカツと笑いながら「いいっていいって」と言っ
て一夏の元に走って行った。彼女は勝気で少々口は悪いが、人を気
遣う一面も持ち合わせるやさしい子だということがわかる。

二人を見ていると一夏の顔が少し赤い、多分鈴がからかっているの
かも知れない。

「……………」

ふと思い出す。そういえばもうすぐクラス対抗戦リーグマッチがはじまる、多分
クラス代表である一夏と、鈴はぶつかるだろう……。そうなる
とISに触れてまだ日の浅い一夏の勝率はよくて3：7と言ったと
ころだろう。

「なにか打開策をかんがえないとな……」

「おーい！想助えー！」

「ん？」

打開策を考え唸っていると一夏に声をかけられる。

「先に鈴と戻ってるから。想助も早くこいよー」

「すまんっ！すぐにいく」

そう言いつつ一夏と鈴はアリーナから出て行く、俺も一度目を閉じ
ISを解除して目を開くと……………。

「……!？」

そこは見知らぬ白だけの世界、
なにも無く何も見えない。
いきなり
の出来事に驚愕している。

「やあ久しぶりだな想助」

「!？」

行き成り後ろから声をかけられ振り向くとそこには赤いロングコート着た赤髪の青年が足を組み宙にフワフワと浮いてこちらを見ていた。

「誰だお前は……」

警戒しつつ距離をとり目の前の青年に問いかける。

「お前が知らなくても俺はキョウスケが赤ん坊のお前を俺に紹介しに来たときから知ってるぞ？……想助？」

「なっ……」

帰ってきた問いに俺はまたもや驚愕することになるなぜならコイツの正体は。

「お前……アルトなのか？」

「……名答……」

アルトは笑いながら………というか俺の反応を楽しんでいるかのようにもみえる。それよりも何故アルトが人間になっているのが気になる。

「まあ今はISになってお前の腕に収まってるけどな」

「そうかコレはお前だったのか……じゃあ何故起動しない？」

「どうかこの場所は何なんだ？」

今の状態を問いただそうとするとアルトは両手を前に出す。

「まあ待て宗助……慌てるな、一つ一つ話していく……いいか？」

「あつ……ああ」

アルトが真剣な顔で言ってきたため押し黙る。

「まずこの世界はお前の精神世界と俺のコアがリンクして生まれた。いわゆる【狭間】みたいなものだ」

「狭間……」

「そして俺はISになって生まれた擬似人格……まあ簡単に言うなら自立AIだな」

「なんでこうなったかは、分からないけどな」と言葉をつけたしアルトはやれやれと言わんばかりに顔を横に振る。

「後俺が起動……いや。お前に力を貸さない理由はな……」

「ああ……」

「俺がお前を信用していないからだ」

【信用していない】・・・アルトに言われて俺は言葉が出なかった。俺は確かにアルトを父さんから受け継いだあの日からアルトを信頼していた。だがアルト本人は俺のことを信頼していないと言った・・・なぜだ。

「教えてやろうか」

「・・・・・・・・」

俺は無言でうなずく。

「お前は俺が信頼に値するような事を何一つしていないからだ」

「え？」

「お前の父キョウスケはどんな時でも部下を守り。時には敵に捕らわれ、敵となったエクセレンを殺す覚悟さえしていた、それだけでもキョウスケは信頼に値する」

アルトは俺を睨みつけ言葉を続ける。

「だがお前にはその覚悟が無い・・・だからお前は俺を使つに値しない」

俺は拳を強く握りアルトを睨みつけ言い返す。

「俺は……」

「ん……？」

「俺はお前を使った事なんて無い！共に戦っていたんだ！！」

そう言い返すとアルトは途端に笑顔になる俺にこう告げる。

「そうか……ならお前の覚悟を俺に見せてみる」

「え」

アルトは両手を前にだし手をかざす、すると手のひらから赤と青……二つの球体が表れる。

「赤い球体がお前の世界……そして青い球体が今お前がこの世界だ」

言い終えると二つの球体から緑の糸のような物が伸び【繋がる】。

「これは【道】だ、この世界に次元を歪める程の力を持った存在が降り立った」

「力を持つ存在？」

「そうだ。コイツが原因で繋がるはずのないお前の世界とこの世界は繋がった、あの時俺たちを飲み込んだ渦はその時の【歪みの道】だ」

そして、アルトのが更に真剣な顔をする。

「ココからが本題だ想助。この世界は【奴】のせいでも非常に不安定だ。いずれこの世界は崩壊するだろう・・・お前ならどうする?」

「倒すに決まっている!この世界には仲間が・・・一夏達がいるんだぞ!」

アルトはフツと笑い「そう言うと思ったよ」と言いつつ話を続ける。

「だがな想助・・・【奴】はこの世界の歪みだ・・・。この意味が分かるか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・つ!」

「きずいたか・・・・・・・・そうだ【奴】を倒せばこの世界の歪みは無くなると同時に・・・・・・・・」

こちらと無効の世界をつなぐ【道】も無くなる。

「お前は「こちらの世界の仲間と。あちらの世界の家族・・・どちらをとる?」

「さあ……………宗助……………お前の覚悟を見せる」

その後元いたアリーナで立ち尽くしていた……この世界を捨てて家族の下に帰るか……、それともこの世界に残り戦つか……。

「そんなこと……聞かれずとも決まってる」

すまない……父さん、母さん、アルフィミィ、レモン……。

「俺は……」

この世界に残って皆のために戦うよ・・・。

「すまない想助……俺もこんな事は言いたくなかったんだがな」

誰もいない白い世界で上を向くアルト。

「……………」

悪いなヴァイス……俺も帰れそうにないよ……。

自分の覚悟・自分の思い（後書き）

ちよいシリーズ&訣別。

赤い衝撃（前書き）

アルト登場、戦闘に入ったら頭の中でアルトの曲を流してみよう。

赤い衝撃

「というわけだから、部屋変わって」

「は・・・？」

行き成りで分からなかった方々のために説明しよう。あの後俺は部屋に戻ると鈴が荷物を持って俺と一夏の部屋にいて、俺と目が合ったとんにこんな事を言ってきた。

「いや・・・俺は別にかまわないが」

「いいの！」

「かまわないのかよっ!？」

俺の発言に鈴は目を輝やかせ、一夏はツツコミを入れてきた。

「ただ・・・」

『『ただ?』』

「織斑先生がなんて言うか・・・」

「・・・」

二人とも無言・・・そう、鈴も織斑千冬が怖いのだ。俺たちのクラスに乗り込んで来たときもそうだった・・・実はあの人IS学園で最強なのではないだろうか。

「そんなわけだから余りお勧めしない」

「そっ……そうね」

表情が少し暗い……本気で一夏と同じ部屋で暮らそうとしていたのだろう。まああの人が許すとは思えないが……。

少したち、鈴が口を開いた。

「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

鈴の顔が少し赤い……大事な話をしようとしているんだろう。俺は一夏に片手を上げて、無言で部屋を出る（その時一夏が【なんですか？】って顔をしていたが俺も男だ、ハッキリ言っただけであの場所はいずらい。

そして廊下に出たわ良いが何をすれば良いのか……。そうやって何をしようか扉の前で唸っていると、扉越しに声が響く。

『最っつっ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ね！』

すると扉が開き鈴が出てくる。

「……っ！」

「おい……り……」

少しだが鈴の目に涙が溜まっていた、ソレを見てしまい呼び止める

事が出来なかつた。とりあえず部屋に戻ると一夏が冷や汗を?きながら固まっていた。

「なっ・・・なにがあつた」

「・・・まずい。怒らせちまつた」

さっきの状態からして多分一夏が悪いのだろうという事がわかる。

「とりあえず一夏、俺の直感がお前にこう言えと伝えているのでお前にこの言葉を送る」

「へ?」

「馬に蹴られる」

「ぐはっ!」

そんな事がありその後も鈴の機嫌は直るどころか日増しに悪化していった、ちなみに一夏と鈴はクラス対抗戦^{リーグマッチ}で一回戦の相手に選ばれていた・・・なんて間の悪い・・・。

「・・・」

一夏や篤、セシリアが訓練の話をしているのを隣で聞いていた俺は、ふと鈴が気になり。

「鈴の様子でも見に行くか・・・」

と、血迷った（おい）言葉を口に出していた。

「想助？どこ行くんだ」

「ちよつとな」

「なによ・・・」

「別にそこまで敵視しなくてもいいだろう」

「・・・・・・・・・・はぁ・・・それもそうね」

「所で鈴、俺がこんなことを聞くのはお門違いだとは思うが・・・」

鈴に数週間前に部屋で部屋で何があったのか聞いてみる。怒った原因は一夏が昔の約束を覚えていなかった為、ついカツとなってしまうたとのこと。

「・・・・・・・・・・」

無言で鈴を見る。

「なっ・・・・・・・・何よ」

「鈴・・・お前は本気である一夏がお前の【毎日酢豚を】(以下略)の意味を理解しているとでも?」

「・・・・・・・・・・」

鈴は汗を流しながら「あー・・・」という顔をしていた。

「はぁ・・・とりあえず一夏の所に行こう、後で第三アリーナに行くって言っていたからな」

俺は鈴の手を引き歩きだす。

「えっ!ちよ・・・・・・・・」

「一夏とこのままでいたいのか?」

「う……」

「だろ？」

こうして俺は鈴を連れて第三アリーナまで向かう。

【第三アリーナ】

「で……今に至るといふことか？……想助」

「ああ……仲直りさせるつもりだったんだが」

「あれが……ですか」

目の前状況に何故こうなったとため息をつく。

「誤りなさいよ！」

「だから、なんでだよ！約束覚えてただろうが！

「あつきれた。まだそんな寝言いつてんの！？約束の意味が違うのよ、意味が！」

二人とも（主に鈴が）頭に血が上ってる・・・収集がつかない。鈴は俺が言った事完全に忘れてるし、やはり一夏は意味を理解していなかった。

「どうするんだ？」

「・・・・・・・・」

もどどどどでもなれ・・・。

この後一夏が（鈴も悪いのだが）鈴の事を貧乳と言って怒らしたため、一発しばいておいた。

それから試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と鈴。俺は箒やセシリアとピットで試合が始まるのを待っていた。一夏と鈴が何かを話している。

【アリーナ内】

「一夏、今誤るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力でこい」

あの二人はまだそんな事を言っているのかと、内心思いながらため息をつく。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

なるほど………という事はあのISにはそれだけの武装があると言う事か。

『それでは両者、試合をはじめてください』

ピーツとブザーが鳴り響きその瞬間に二人は動きだした。

次の瞬間【ガギインツ!!】と響く。

瞬時に展開した一夏のIS【白式】唯一の武器《雪片式型》で鈴がてにした青竜刀を防ぐ。

「ふうん。初撃をふせぐなんてやるじゃない」

「そりゃどうもっ!」

ソレを合図に二人は己が得物で打ち合う。すると鈴の肩のアーマー

がスライドして開く。中心の球体光った瞬間、一夏が吹き飛ばされる。

「今のはジャブだからね」

ドンッ！！

「ぐあっ！」

そして一夏は見えない何かにまたも吹き飛ばされる。

【ピット内】

「セシリア・・・あれは？」

「『衝撃砲』ですわね」

「『衝撃砲』」

「はい、空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す」

セシリアが言うにはあれも第三世代型のISらしい、ステルス効果の高い砲撃・・・一夏に勝機はあるのだろうか・・・。

ズガアアアアアン！！！！。

すると会場内で巨大な爆発音が響く。

「なんだ!?!」

モニターを見るとそこにはフルフェイスで顔を隠し、いや・顔だけでなく『全身装甲^{フルスキン}』だった。

「……っ」

するとセシリアが走り出す。多分先生の所にISの使用許可を取りにいったんだろう。

「箒!此処は頼む!!」

「想助!?!」

「おれは会場に入れる場所を探してみる!」

そういうと俺は走り出す……入れる場所が無い場合は……。

「先生!わたくしにIS使用許可を!すぐに出撃できますわ!」

「そうしたいところだが、……これを見る」

画面を数回叩き、画面の情報を切り替える。

「遮断シールドがレベル4設定ステージの扉は……すべてロック」

「シールドの解除を三年の清栄たちにまかせているが、あと何分かかるか分からない・・・政府に援助の連絡を入れたがすぐには来ないだろう」

画面をみると一夏と鈴は協力して謎のISと戦っている。

「では・・・結局待っていることしか出来ないのですね・・・」

セシリアが頭を抱えてベンチに座ると同時に通信が入る。

『織斑先生！』

「どうした？」

『アリーナ観客席の屋根の上に人が！』

「なに？」

再びモニターを叩き画面を展開する、そこには遮断バリアを目前に男が・・・想助が立っていた。

「ちっ！なにをやっているアイツは・・・」

【観客席】

「なるほど・・・これが遮断バリアか・・・」

この出力ならアルトのステーキで打ち破れるか・・・？

「さあ・・・二人を助けに行くぞ・・・、アルトッ!!」

【司令室】

「「「!?!?」」」

想助がアルトの名を呼んだ瞬間赤い粒子に包まれ想助の体は見たことも無いISに包まれていた。

「なんですの・・・あれは」

「南部のIS・・・起動したのか」

画面に映っている想助は右腕のステーキを構える、そして。

『邪魔だあああああああ!!!!!!!!!!』

ガンッ!!!!!!。

とステーキを打ちだす、するとシールドにヒビが入り。

「まさかシールドを破壊するきか!?!」

【観客席】

ちっ！一発じゃ足りないか……ならば!!。

「全弾もって行けえええ!!！」

ガンッ！ガンッ！！ガンッ！！！！ガン！！！！……ズガア
ン！！！！。

ステーキの炸薬を全弾発射しシールドを破壊、その勢いに合わせて
全ブーストを展開。会場に潜入する。

『今行くぞ！一夏、鈴!!！』

想助をモニターで見っていた教員、及び生徒達は彼の姿を見てこう思
った……その姿はまさに。

【赤い衝撃】

赤い衝撃（後書き）

次はアルト初の戦闘^{バトル}シーンです。

その名は！ランページ・ゴースト【アインズ】！！（前書き）

これが俺たちの切り札だ！・・・的な？。

その名は！ランページ・ゴースト【アインズ】！！

想助がアルトを起動させアリーナに潜入する少し前……。

【一夏視点】

「……くそっ」

一夏は何度も斬撃を繰り出すフルスキンが全身装甲はいとも簡単にすり抜ける。

「一夏っ、馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

二人係で敵を翻弄するも相手は全身のスラスタでいとも簡単に回避する、しかも攻撃を受けた後必ず反撃に転じてくる。その上長い腕を振り回し接近戦闘、ビーム砲撃のおまけつきで。

「ああもっつ、めんどくさいわねコイツ！」

鈴が衝撃砲で砲撃するも敵はその長い腕で不可視の砲撃を叩き落す、その際に一夏はビームの射程範囲内から離脱……だが。

「あっ！？」

「鈴ッ！！」

ージ。中から複数の小型ミサイルが発射される。

「……………!?!」

フルスキン
全身装甲はスラスターを全開にして踊るようにミサイルを回避するが、反応が送れ二対のミサイルが直撃する。その隙に一夏は鈴の元に駆け寄る。

「大丈夫か!? 鈴」

「う……………うん、でもアレは……………」

「わかんねえ……………一体どこから……………」

すると聞き覚えのある声が左から聞こえる。

「当たるかは賭けだったんだが……………どうやら勝ったみたいだな」

『『そつ……………想助え!?!』』

そこには赤い重装甲のISを身にまとった想助が立っていた。

【アリーナ】

「二人とも・・・無事だな」

「そっ・・・想助！」

「どうしてアンタが！・・・てかそのIS・・・」

鈴が想助のISを見て驚愕する・・・なぜなら想助のIS【アルト・アイゼン】は左手に【三連マシンキャノン】右手には【杭打ち（リボルビングステーク）】そして両肩には【スクエア・クレイモア】を装備している、その武装を見る限り、時代を逆行したようなISだからである。

「そんな古臭いISで大丈夫なの？」

鈴が心配そう（違う意味で）に聞いてくるが。

「確かに古臭い武装だが・威力は関係ない」

「そ……そうなのか？」

「無論だ……とりあえず」

『ブフォン』と音をたて【フルスキン全身装甲】は一夏達を再びロックする。

「てっ！ちよつとポロポロになっただけで全然効いてないし！」

「そりゃ二発しか当たってないしな」

「そんなこと言ってる場合か！よけるおおおお！？」

ズガアアアアンツ！！！！。

想助達は散開し体制を立て直す。

「あぶないなあ……って、想助おそっ！」

「アルトは装甲が厚い分、運動性にかけるからな」

「大丈夫なのか？」

「安心しろ」

ガシャンとステーキのシリンダーを取り出し空になった炸薬を捨てる、そして新しい炸薬を【コール】装填する。そして瞬時にブーストを展開、加速する。

「っ！」

「・・・!!?」

ゴッ!!!!!!!!。

「なっ!?!」

「はやっ!!!!」

アルトの加速は一夏の【イグニッションブースト瞬時加速】をも超えるスピードで敵との間合いを詰めステーキを振りかざす。

「止められるものなら・・・止めてみる!!」

ズガンっ!。

「!?!?!?!」

ステーキを全身フルスキン装甲に突き刺し頭上に持ち上げる。

「ステーキ・・・いけえっ!!」

ズドンッ!!という炸裂音と共にステーキに突き刺さった敵は吹き飛ばす。

「やった！」

「いやっ！浅いー！！」

敵の装甲にはビビのような損傷が見られるが、本体にはダメージが通っていない。

「やはり全弾ぶつけないければ。装甲を通らないか・・・」

ならば。

「おい！鈴」

「なによっ！こっちも手がいっぱいなんだけど！？」

「一旦引いてくれ」

想助の言葉に鈴は目を丸くする。

「なんでよ！？」

「でかいのをアイツにくれてやるからだ」

「ハア！？」

「一夏っ！」

全身装甲に攻撃を加えようとしていた一夏を呼び止める。

「なんだ！想助」

「アレをやるぞ！」

「アレ？・・・まさかアレ！？まだ訓練でも成功してないんだぞ！」

鈴は「アレってなによ？」という顔をしているが気にしてる場合ではない。

「アルトなら可能だ！・・・ぶっつけ本番だがいk」一夏あつ！・・・
つ！？」

いきなり割り込んできた声の出所を探すと中継室で箒がマイクを掴み叫んでいる。

「男なら・・・男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

あまりの音量のでかさに耳鳴りがするが気にしている場合ではない。

「チツ！」

敵のアイセンサーが箒を捕らえていた、もう時間が無い。

「鈴！！箒を守れ！！！！一夏！！！！ぶっつけ本番だろうがなんだろつがやるぞ！！！！」

「わかってる！！！！」

一夏と想助は互いに並びながら高速で敵に接近する。

「おおおおおお!!!!!!」

一夏は【瞬時加速】で敵の背後に回る。

「……………」

だがヤツはその速度に反応してみせ砲身を一夏に向ける…………が。

「がら空きだっ!!!!!!」

「!?!?!?!」

ガガガガガガガッ!!!!!!!!!!。

宗助は敵が一夏に気をとられているスキにマシンキャノンを連射と同時にクレイモアを展開、全弾お見舞いする。

「はあああああ!!!!」

一夏は雪片を敵に突き刺し盾にしなからクレイモアの雨中を突進する。

「ギ…………ツ…………!!…………?!」

その状態から何とか逃れようとするも一夏の雪片と想助のクレイモ

アの中。身動きが取れるわけが無い。

カラカラカラッ！とクレイモアの残弾が切れると同時に想助は【ヒートホーン】をコールする。この武装は元々アルトの頭部に付いたその名の通り【角】だったのだが、ISになってからは剣へと変貌していた。

『『おおおおおおおおおお！！！！！！！！！！』』

二人は同時に敵を切り上げ上空へと飛ばす。一夏はソレを追い越し更に上空へと飛翔する。

「ジョーカー・・・切らせてもらおう！」

ガキンツ！とステークを鳴らし全てのブースターとバーニアを展開同じく飛翔する。

二人はそれぞれの得物を上下から振りかざす。

「ランページ・ゴースト【アインス】！！！」

「これが・・・」

「俺たちの・・・」

「切り札だっ!!!」

「#\$!%TG!ML」

ドウンッ!ドウンッ!ドウンッ!ドウンッ!ドウンッ!ドウンッ!
!!!!!!!ズバンッ!!!!。

全身装甲は声にならない声を上げ空中で真っ二つに粉碎され落下していく。その際一夏と想助は左右の地面に降り立ち、一夏は雪片をヒュンッ!と一振り、そして想助はシリンダーからジャララ・・・と空の弾奏を引き抜く。

「どんな装甲だろうと・・・」

「斬り開くのみ・・・」

これが後に彼らの切り札となる、ランページ・ゴーストの始まりである。

その名はーランページ・ゴースト【アインズ】！！（後書き）

アレ？・・・アレと言えば・・・ガツタイダアア！！。

転校生、波乱の中心はいつも一夏(前書き)

シャルルとラウラ登場です。

転校生、波乱の中心はいつも一夏

アリーナでの事件の後、俺は織斑先生に呼び出されていた。話の内容はやはり俺の腕に収まっているアルトアイゼンについてだった。

「ふむ……そうか、ソイツが……」

「はいっ、俺がこの世界に飛ばされる前に乗っていた【PT】パーソナル・トルーパー……
……アルト・アイゼンです」

別の世界の兵器がこの世界に飛ばされた影響でISに変化……、なんてことは織斑先生も信じられないという顔をしていたが「お前が嘘を言っているようには見えんからな」と。あっさりと信じてくれた、信頼されているのだろうか？ソレならば俺もその信頼にこたえなければいけない。

「先生」

「?……なんだ」

「もう一つ……話しておかなければいけないことが」

俺はこの世界に起きた事……俺が飛ばされた理由……そして、この世界に降り立った存在について話した。

「ふっ……この世界が崩壊か……」

「信じられませんか？」

「嘘は言っていないのだろうか？」

「……はい」

先生は少し考えるそぶりを見せて、俺にある事を聞いてきた。

「お前はそれでいいのか……」

「はい？」

「ソイツを倒したらお前は」

「……覚悟は……決めました、それに」

「それに？」

「俺は自分の家族が好きです……でも、こんな俺を信じてくれる先生やクラスメイトの皆、一夏達も同じくらい好きなんです……だから俺は」

「……」

「この世界に残り……ヤツを倒します」

そういうと織斑先生は「フツ」満足したかのように笑う、すると先生は「ならば私が言うことは何も無い」と言っ、教員用の自分の机に向き直った。

「では、失礼します」

誰もいない教員室を出ようと出口へ向かおうとすると、先生はこちらを向かずに俺に問いかけてきた。

「最後にいいか・・・」

「はい・・・」

「お前が追っているヤツの名は？」

俺は出口の方向を向いたまま答える。

「アインスト」

その後俺は部屋に戻りいつも道理、一夏達と食事をし。シャワーを浴びて一夏に了解を得て外に涼みに行く、ふと出来れば風呂に入りたいなと思ったが大浴場は男女別タイムテーブルの調整中との事。今月中には何とかしますといていた山田先生に感謝しながら俺は自分の部屋に足を向ける。

するとそこにはすでに寝間着を着た（俺もだが）一夏が扉の前で箒に何かを言われていた……、また何かやらかしたのか？と思
い俺は二人に近づく……すると。

「ら、来月の、学年別個トーナメントだが……」

学年別個トーナメント？……ああ、そういえば【のほんさん】
からそんな話を聞いたな。

「わ、私が優勝したら」

この後、箒の口から出た言葉に一夏は（少し離れていた俺も）驚か
された。

「つ、付き合ってもらおう！」

びしっと一夏に指を差している箒、そして固まる一夏……そし
て。

「……………」

なんでこの場に居合わせてしまった……と後悔する俺。

この後俺の存在に気づいた篤が顔を真っ赤にして一夏同様固まったのは言うまでも無い。

それから少ししたち月曜日のホームルーム前、クラスメイトの女の子達は一夏を囲んでISSスーツのデザインの事で会話に花を咲かしていた、俺はというとのほほんさんに捕まり山田先生の愛称はどのような物がいいかと淡々と話を聞かされていた。

ちなみに山田先生には八つくらい愛称が存在する。ソレはそうとそろそろ先生が来る頃だろうと、のほほんさんに席へ戻るよう促し自分も席に着く。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

予想道理に先生が入ってきて教室の空気がピシっ！と引き締まるのが分かる、流石は織斑先生と言った所か。

話を戻そう。どうやら今日から本格的な実戦訓練を開始するらしい、ISでの授業と聞き生徒達の顔も引き締まる。それと各人のISSスーツが届くまでは学校指定のものを使うらしい……。俺？俺は一夏と同じく特注の物を使っている。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

山田先生はちょうどめがねを吹いていてあわててかけ直す。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「え……………」

「は……………」

「……………ええええええっ!?!……………」

俺と一夏は同時に驚き小さく声をあげ、その後に女子達が大声で叫びだす……………前のもこんなことがあったような。

そんな事を考えていると教室のドアが開き二人の転校生が入ってくる

る。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきた二人を見て教室のざわめきは止まる。

「まあ…………こうなるわな」

「ああ……………」

なんとって二人のうち一人が男子なのだから

「では二人とも、自己紹介をお願いします」

「はいっ」

「……………」

返事をしない眼帯少女にあたふたする山田先生を置いて自己紹介が始まる。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

笑顔がまぶしいこの少年シャルル・デュノアを見て俺は違和感を覚える。

(…………お…………?)

彼が放つ不陰気がどこか違うのだ…………どちらかと言うと女の子の

ような・・・。

「お、男・・・?」

俺がそんな事を考えていると、誰かがそうつつぶやいた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を」

おれはデュノアの話の途中で（ピキーン）と感じた・・・この後来るであろう・・・あのソニックウェーブが！（経験済み）。

（一夏！耳をふさげ！！）

「・・・?」

アイコンタクトで危機を知らせるが時はすでに遅し。

「ぎゃ・・・」

「はい?」

『ぎゃああああー！ー！ー！ー！』

案の定、教室内にソニックウェーブが響き渡る・・・一夏は『ぎゃあああ』と叫んでいた・・・すまん一夏。

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「明るい系の織斑君とクールヒート系（静かに燃える熱血野郎）の南部君に続いて、守ってあげたくなる系のデュノア君！！」

クールヒートってなんだ？。

「地球に生まれてよかった〜〜！」

大げさすぎるだろうっ！。

ああ・・・この後、他のクラスから女子が波のように押し寄せてくるのだらうと。一夏同様頭を抱えていると、織斑先生が面倒くさそうに女子達を制止する。

山田先生もあわてて女子達を落ち着かせ自己紹介の続きを促す・・・
・だがもう一人の転校生である眼帯少女は冷たい空気を体全体から放っており、口を閉じたまま喋ろうとしない。

「・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

行き成り素直になった、と思ったのは俺だけではないだろう・・・
いやっ皆ぼかんってしてたし。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

あっ、また面倒くさそうな顔をしている。

「了解しました」

すると彼女は軍人のような姿勢で……いや、いまの話聞いている限り彼女は俺と同じ軍人なのだろう、軍人特有の格好で挨拶をする。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

……………なんだこの痛い沈黙は。

「あ、あの、以上……………ですか？」

「以上だ」

この痛い空気にいたたまれなくなった山田先生が笑顔でラウラに訊くが帰ってきた無慈悲な即答に泣きそうになる山田先生。

「……………？」

「！貴様がー」

ふと一夏とボーデヴィツヒの目が合いボーデヴィツヒは明らかに分かりやすい怒りを表し、一夏の席へと歩み寄る。

「……………ハア」

と俺はこの後予想できる彼女の行為を阻止するために席を立つ、その際に隣の席の女の子に「どうしたの？」といわれたが「ちょっとな」と返し、歩く速度を上げる。

「……………」

「へっ？」

ボーデヴィツヒは一夏の目の前で手を上げ振り下ろす……だがその手は届くことは無く、横から腕をつかまれ止められていた。

「何のつもりだ……貴様」

「何のつもりだ？…それはこちらのセリフなのだがな」

クラスの織斑先生以外は想助の変貌っぷりに驚愕していた、普段想助は怒りを表に出すことは無いが、彼女の行動に本気で怒っているのが分かる。

「お前に非があるのなら好きにすればいい……だが……」

ボーデヴィツヒをさらに強く睨みつける。

「何の非も無く友人を傷つけられるのは……見てて気分のいいものじゃないんでな」

その言葉を聴き織斑先生は「フツ」と笑い山田先生は「わあ……」と関心していた、

クラスメイト達はというと「キヤー！！」と声を上げるもの、「お……男の友情……」と目を輝かすものとまちまちだった。

「……………」（後先考えずに恥ずかしい台詞言った人）」

内心ものすごく恥ずかしかった。

「……ふんっ」

彼女は鼻を鳴らすと俺の手を振り払い、一夏に向き直る。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

そついうと彼女は元いた場所に戻る、彼女を目で追っているとデュノアとふと目が会う。

「……はは」

「……」

デュノアは「災難だったね」といった感じで俺に苦笑いをする……
・その時俺はため息を付きながらこんなことを思った……。

「もしかして波乱の中心って……一夏と……俺なのか？」

礼を言ってくる一夏に片手を上げて「気にするな」と言う感じに手をふる。

ホントにこの世界は退屈しない・・・いろいろな意味で。

転校生、波乱の中心はいつも一夏（後書き）

シャルルとラウラのファーストコンタクトはこんな感じでした。

逃げに走るも良き事なり（前書き）

久しぶりの最新です。

逃げに走るも良き事なり

あの騒動（ボーデヴィツヒと想助のにらみ合い）後、俺たちは織斑先生に。

「おい織斑、南部。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろ」

と、言われて一夏と共にデュノアの元に向かう、すると彼？・・・から話しかけてくる。

「君が織斑君？はじめまして。僕は」

「一夏」

「おっ」

一夏に合図を送ると同時にデュノアの手を【ガシッ】と二人で片方ずつ掴み取る。

「へっ？」

デュノアはポカン・・・としていたが今はそんな暇は無い。想助は扉を開けると同時に外を見回し安全を確認。

「敵影なし・・・。走るぞ一夏っ！」

「了解！」

「えええええ！？」

デユノアは訳が分からないまま二人に引っ張られるように走り出す。

「ちよっ……ちよっと!? コレハ一体?」

「時期にわかる……来たぞっ!」

教室を出て走り出し階段を下って一階に下りた先には……。

「ああっ! 転校生発見!」

「しかも織斑君や南部君と一緒に!」

HRが終わると同時に転校生デユノアの情報をかぎ付けて各クラスの尖兵達が情報先取りのために駆け出てきた、捕まったら遅刻は確実にある。

「いたっ! こっちよ!」

「者ども出会えい出会えい!」

なぜこの学園は男が絡むとこんなに生徒のキャラが変わるんだろうか?。と言つか男に飢えすぎだろおに。

「一夏……この学園にいたら何時か、女性恐怖症になるような気がする」

「それは前々から思ってた……」

気を取り直して。

河原の花以外のを上げるね！」

『もつと前からちゃんとした物をあげろっ！』』

一夏と同時にツッコミを入れながら女子の包囲網を潜り抜ける、しかもデュノアは今だ混乱中。

「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

「……………」

なぜそんな質問を？と俺は思いながら話を聞いている。

「そりゃ男子が俺たちだけだからだろ」

デュノアは「意味が分からない」といった顔をしている。

「珍しいんだろ……ISを操縦出来る男は今のところ俺たちだけだからな」

と、俺は一夏の問いの後に、こう繋げるとデュノアは納得したかの用に声を上げる。

「あつ！ ああ、うんそうだね」

「……………」

やはりデュノアは何かを隠している……俺たちの会話と動作が
かみ合っていない、……………もしかしてデュノアは……。

「（いや……考えすぎか……それにクラスメイトを疑いたくないしな）」

想助は頭の中の邪念を振り払い、一夏やデュノアと共に第二アリーナの更衣室へ急ぐ。

「想助だ」

「へ？」

「南部想助……俺の名前だ」

走りながら俺はデュノアに自分の名を明かす（明かすとか、そんな大げさなことではないが）。

「え……ああっ！うんよろしく南部君」

「想助でいい」

「じゃあ僕もシャルルでいいよ」

「それじゃあ俺も一夏でいいぜ」

「うん、二人ともよろしくw」

そう……今はこれでいい、今は教えてくれなくとも名前を交換し、仲間になれば何時かは自分の事を話してくれる。

「さてっ……急ぐぞ二人とも！」

「おう！」
「了解」

【更衣室内】

「無事に到着・・・だな」

「授業前にこんなに疲れるなんて・・・」

「さっ・・・とりあえず着替えよう！時間が無い」

そう言つと一夏は征服のボタンを一气にはずしTシャツも脱ぎ捨てる。

「わあっ！？」

「？」

俺も着替えようと制服のボタンを外しにかかるといきなりデュノアが声を上げるものだからそちらに目がいく。

「どうしたシャルル着替えないのか？時間が無いぞ」

「う、うんっ？き、着替えるよ？でも、その、あっちむいてて・・・
ね」

「????・・・まあ別にジロジロ見るきはないが」

「でもシャルルはジロジロ見てるよな」

「み、見てない別に見てないよ!？」

いくらなんでも反応しすぎだろ、と思いつつも俺は後ろを向き着替え始める。

「まあ、本当に急げよ。初日から遅刻とかシャレにならないからな」

「それ以前に、あの人はシャレにしてくれんぞ」

確かにと一夏は笑いつつ俺に返事をしてくる一方後ろで【シャツ】と音がしたので、振り向くとシャルルがもう着替え終えていた。

「シャルル・・・着替えるの早いな」

「い、いや、別に・・・って二人ともまだ着てないの？」

俺は上半身を着替え終え、ズボンを脱ぐ所だった一夏はちょうどスーツの下を着ている途中だった(はいっそこ、男の着替えなんていらないと言わない)。

「これ、着るときに裸っていうのが着づらいんだよなあ。引っかか

って」

「ひ、引つかかって？」

「おう」

「……………」

シャルル顔をカーーツと赤くする…………。

「（やっぱり）」

このとき俺はシャルルが女であると確信した…………とりあえず。

ポカッ！。

「いてっ！」

「一夏……男同士でもその会話はどうかと思っぞ」

とりあえずフォローの意味もこめて一夏の頭をしばく、ついでに。

「ほら、男好きの（ホモとも言う）シャルルが顔を真っ赤にしているじゃないか」

「えっ!?!」

「ホモじゃないよっ!」

「美少年でホモ…………レベルが高いな…………」

「だからホモじゃないって！・・・一夏も本気で引かないでよ！！？」

「さて行こうか」

「何時の間に着替えたの！？ていうかこの状況作った張本人がスル
ーしていかないでよ！」

「よしっ急ぐか」

「一夏まで！？ていうか想助ってそんなキャラだったの！？」

シャルルは何とか誤解？を解こうと想助に詰め寄ってはからかわれ、
顔を赤くしながらアリーナまで三人で走って行った。

さっきも言ったが今はこれでいい……何時か自分から話してくれ
る時まで俺は待つとしよう……。

俺もいずれは自分の素性を皆に明かさなければいけないな・・・。

逃げに走るも良き事なり（後書き）

シャルルちょっとまだぎこちないです、。

実戦訓練パート1（前書き）

ー夏はフラグたち過ぎだと思っ……いまさらだけど。

実戦訓練パート1

【第二グラウンド】

「遅い！」

「「「すみません・・・」」」

その後、シャルルをからかいつつ結構急いだんだが結局間に合わず先生に怒られましたー
【マル】・・・スマン、ちょっとボケてみた。

バシンッ！。

「ぶっ！」

「くだらんことを考えている暇があったらとっとと列に並べ！」

「りよ・・・了解」

織斑先生の一撃をもらいつつも俺は一夏やシャルルと列に並ぶ。

「自業自得だね」

「こんな時にボケるなよ」

一夏・・・お前には言われたくないぞ、と思っていると横から声がかけられる。

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

となりの隣・・・つまり一夏の影に隠れて見えにくいのが、セシリアが一夏に（少し棘がある喋り方で）話しかけていた。

ちなみに俺は一夏とシャルルの真ん中に並んでいる・・・えっ？
どうでもいい。

「スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

「それはシャルルのホ・・・ムグウ！？！！」

「えっ？」

「なんでもない！なんでもないからッ！！」

シャルルのホモ疑惑が発覚しました、といをうとしたら横から口を（ものすごい力で）ふさがれた・・・シャルル・・・息が・・・

「ほっ・・・ほら！僕たちのISスーツって女性用のスーツと違って、全身がすっぽり入るくらい・・・なんていうか・・・ほらっ！スキューバーダイビングの全身水着みたいな感じじゃない！だから着にくくて僕が時間掛かっちゃってさあ！あははははは！！！！」

「は・・・はあ」

「シャルル、何であせってるんだ？」

「あせってないよ！？」

いや・・・十分あせてます。だってめっちゃ早口だし。

「所でデュノアさん」

「はい？」

「そろそろ手を放してあげては？・・・想助さんの顔が」

「へっ？」

「・・・・・・・・・・」

そう、彼の口と鼻はシャルルの両手で無理やり押さえこまれているため、限りなく少量の酸素しか取り込めない上に二酸化酸素が排出されないため今にも窒息しそうで。顔が青く染まっていた。

「わー！！ごめん！！」

「ぶはっ！・・・・・・・・すう・・・はぁ・・・（死ぬかと思った）」

「今回はお前が悪いな」

「遅れたフォローのつもりだったんだが・・・」

「僕をだしにつかわないでよー！」

おこられました。

そしてこの後、織斑先生にも怒られました。なんで今日俺こんなにボケてるんだ？（作者の意思です）。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「」「はい！」「」

一組と憎み……スマンまちがえた。二組の合同練習のため今日は倍の人数で授業が始まった、みんな気合が入ってるように見えるのは気のせいではないのだろう、実際俺も訓練校のを思い出し少し気合が入っていた。

「今日は戦闘を実演してもらおう……凰！オルコット！」

「」「はいっ！」「」

「今回はお前達にやってもらおう……相手は」

キィィン。

「ん？（なんだこの音は？）」「

他の生徒達も聞こえているらしく、あたりを見回している。

「ああああーっ！ど、どいてくださいっ！」「

すると空からISをまとった山田先生が降下……ではなく落下してきた（一夏めがけて）。

ドカーン！。

そのまま一夏と先生は衝突する、一夏はギリギリ白式を展開し受け止めゴロゴロと転がっていく。

「おっ……ころがるころがる」

「言ってる場合じゃないと思うな……」

「ですよー」。

「アンタってボケる時とツツコム時の差が激しすぎんよ」

「そうですね」

「そっだぞ」

「いたのか簿」

「………斬るぞ」

スイマセン………とっ………とりあえず一夏と先生を助けに行こう。

「あっ逃げた」

「言っちなシャルル」

その後、一夏の【プリン騒動】があったが無事授業は進む。(プリン騒動は本編を見ていただければ分かります、ちなみに71ページです。

そして現在セシリアと鈴が山田先生と交戦中、見るからに二人は山田先生に押されている。俺は山田先生の動きを見ながら關心していた。

「(リヴァイブをあそこまで使いこなすなんて・・・教師の名は伊達じゃないと言う事か)」

俺でもあそこまでリヴァイブを使いこなすのは無理だ。

「終わるぞ」

織斑先生の言葉道理二人は山田先生に撃墜され落下する。

「くっ、うつ・・・。まさかこのわたくしが・・・」

「あ、アンタねえ・・・何面白いように回避先読まれてんのよ」

「り、鈴さんこそ！無駄にはかすかと衝撃砲を撃つからいけないんですわ！」

「こっちの台詞よ！何ですべっ！ト出すのよ！しかもエネルギー切れるのはや・・・」

「そこまで」

「「きゃうつ！」」

俺は喧嘩をしている二人の元に歩み寄りデコピンをくらわす。

「なにすんのよ！」

「なにをするんですか！」

二人は少し涙目になりながら行き成り現れた俺に怒り出す……ちよつと強くやりすぎたか？。

「いちいち喧嘩をするな、ちなみにお前達の敗因は互いに足を引っ張りあつたからだ。確かに山田先生の操縦技能はすばらしい……あつぱれだ！」

「……」

「スマン……話を戻す……。専用機持ちでも手の余るあいてだが一对一ならともかく、【遠距離型のセシリア】【近く中距離型の鈴】二人が協力すれば十分とは言わずとも先生に勝つことは出来ただろうな」

「「う……」」

「今度からは一夏とだけではなく、他のヤツとも連携の訓練をするんだな」

まあ説教紛いの事はこれぐらいでいいだろうと列に戻ろうとすると。

「では次、南部。貴様が相手だ」

.....。

「はい？」

「きこえなかったか？さつさとISを起動しろ」

「俺だけですか・・・？」

「今度は一対一での実演をしてもらう」

「なるほど・・・」

「」「」「」「」「」「」「」

何故そこで皆俺に向かって合唱する。

「.....はあ、了解です」

「よろしくお願いしますね南部君」

「こちらこそ山田先生・・・お互い本気で」

「はい」

アルトVSラファールリヴァイブのゴングが鳴り響く。

「大丈夫かな想助？」

「大丈夫じゃね？」

ハイそこ釘刺すな。

実戦訓練パート1（後書き）

次回は想助^{アルト}VS山田^{リザマイネ}先生です、おたのしみに？。

実戦訓練パート2 (前書き)

アルトはやはりかっこいい！

実戦訓練パート2

実戦訓練を開始するため山田先生と俺はお互いに向かい合うよう位置につきISを起動する。

「……………」

もうだいぶ慣れたがISの【アルトアイゼン】は搭乗するのと装着して操縦するのでは勝手が違う、通常人間に掛かるGはシールドによってほぼゼロになり元々飛行技能を持たないアルトは（スピードこそ落ちるが）空中戦も可能だ。

「……………（ギユ）……………（パツ）」

手を握りそして開く、数回同じ事を繰り返し不調が無いか確認する。

「よし……………問題ない、いけるなアルト」

その問いに答えるかのようにアルトは【ヴォン】と振動する、ふと山田先生に視線を向けると先生もアサルトライフルに不調が無いか見ていた。

「……………?」

こちらの視線にきざいた用で（にこっ）と笑いかけてきた。

「……………」

その視線で恥ずかしくなり目線をそらしてしまった……なにや
つてるんだ俺はと思っっていると。

「想助ー！ー！！がんばれよー」

この声は一夏。

「想助！男を見せてみる！！」

二人目は箒。

「がんばれ想助！」

そしてシャルル。

「そ〜ちゃん〜ん！ファイト〜お〜〜！」

この声はのほほんさんか。

「負けは許しませんわよ！想助さん！」

セシリア？。

「仇はとりなさいよっ！！」

鈴まで……まったく二人とも無茶を言う……。

だ
が
・
・
・
・
・
・
。

「期待されてるんだ・・・出来る限りやってみるさ！」

そんな俺たちを見ていたのだろう織斑先生は【フツ】と笑い片手を上にかざす。

「両者位置についたな・・・ルールはシールドエネルギーを先に0にしたものが勝者とする」

俺と山田先生は互いに織斑先生に向かってうなずいた。

「では・・・始めっ!!！」

「っ……!!」

山田先生は上空へ、そして俺は後方へと互いに【ドンッ!!】と音を立てながら距離を取る。山田先生はすかさずアサルトライフルで俺に狙いを定め上空から撃つてくる。

「……っ」

流石は元代表候補生、狙いも正確で直撃コースだこのままだと確実に直撃する。

「だが！」

脚部と腰下のブースターとバーニアを展開、機体を地表すれすれで保ちホバーリング状態で移動。基本機動性に欠けるアルトだが元が水陸両用の機体、空中でこそ遅いが地上では直線の突撃時以外にこのホバー状態ならそれなりのスピードが出せる。

ガガガガガッ!!!。

弾丸を回避し弾が地面に激突する。

「！」

山田先生も開始直後に放った初撃をかわされた事に驚いていたがすぐに次の体制に入る。

山田先生の射撃はセシリア以上に正確だ……だが正確すぎる故に弾のきどろが読みやすい、先生の動きを見ていればかわせなくも無い……。

「そろそろこつちも打って出るか……スプリットミサイル！」

二対のミサイルをコールと同時に先生にロック、先生目掛け飛び出す。

「追尾ミサイル！」

山田先生は空中で後退するがミサイルそれ以上のスピードで追いかけてくる、しかもスプリットミサイルは追いかけるだけではない。

バシユ……バアン!!。

「くっ!?!」

ミサイルの外装甲がはずれ中から小型ミサイルが発射される、山田先生は最初こそ驚いていたものの。

「はぁ!!」

すかさずショットガンをコール、ドンドンッ!!と二回撃ちミサイルを見事落として見せた……だが。

「かかった!!」

「えっ？・・・っ！！？」

ミサイルの爆煙が立ち込める中、その爆煙の煙を突き破って先生目掛けステークを突き出す。だが先生はすぐさま反応し、かすりはしたものの回避して見せた。

「甘いです！」

「なっ・・・っあ！？」

しかも先生は回避と同時に体制を建て直しショットガンを撃ってきた、反応が送れ何発かもらってしまっ。

「っ・・・流石です山田先生、まさかアレをかわされるとは」

「えへへ・・・少してれますね、でも今のは冷や汗ものでしたよ？南部君も流石ですね」

「恐縮です」

会話が終わると二人は自分の得物を構える。

「ふっ！！」

「はっ！！」

その戦闘訓練を離れてみていた、生徒達は啞然と二人の戦いを見ていた。

「す……すごい」

「あたし達なんて手も足も出なかったのに」

鈴もセシリアも山田先生と戦っていたから先生が強い事は身をもって知っている、だが想助がその先生相手に互角とまでは行かないがソレに近い戦いをしていることに驚いていた。

「想助のヤツ……あんなに強かったのかよ」

「うん……僕は想助の戦闘は始めてみるけど……それでもすごいと思う、なんて言うか」

「？」

「戦い慣れてる……」

篤が答えた通り……彼は前から何処かで戦っていたような感じがする。

「戦い慣れてるか……そうかもな」

「うん……」

一夏達は再び今戦っている二人に目を向けると、ちょうど想助が鞘に入った赤い剣をコールして先生に切りかかるところだった。

「……」

ソレとは別に想助目掛け常に目を向けていたラウラ・ボーデヴィツ
ヒ。

「やはり……あの動きと身のこなし、そして相手の動きを見る観察眼……もしやヤツは私と同じ」

軍人か
・
・
・
・
・
。

「うおおおおおおお!!」

「くっ!」

ヒートホーンをコールしすぐさま鞘から抜き放つ、そして地上から両肩のブーストを全開一気に距離を詰める。流石の先生も直線のアルトのスピードに反応が遅れ刀身が赤く光り熱を帯びたヒートホーンを喰らいシールドが大幅に削られる。

アルトは【可能な限り遠くの敵機の懐に飛び込み、必殺の一撃を撃ちこんだ後急速離脱】をコンセプトに作られた機体だが、その性能を想助はまだアルトの性能を完全には引き出せていないどちらかと言えばその性能にまだ頼っている。

「もらいました!」

ドオオオオオンツ!!!。

「ガア!?!」

想助とは違い山田先生は自分でリヴァイブの性能を引き出している、先生のセンスもあるのだろうが専用機と量産機で此処まで差が出る。

「ちっ!.....だあああ!!」

先生にグレネードランチャーで撃ち落とされるが地面スレスレで体を反転、バーニアで立て直す。

「……………む？……………ちっ！」

撃ち落とされた際ヒートホーンを落としてしまった事にきずく、先生は体制を立て直した隙を見逃さずグレネードランチャーをアサルトライフルに取り換える、しかも今度は両手に持ち接近してくる。

「勝負をかける気が……………」

互いにシールドエネルギーは残りわずか、先生が勝負に出たと言う事は先生のエネルギーも残りわずかなのだろう……………。

「ならば……………」

想助はブーストを全開にしてマシンキャノンを先生目掛け撃ちながら前進。

「っ!?!?」

先生はその攻撃を回避するため機体を右……………左に踊らせながら再度上昇する、だがその間に想助は先生のちょうど上空に要る位置に立ち上空目掛けクレイモアを展開する。

「クレイモア!【収束】から【散開】へ切り替え……………発射……………!……………」

ガガガガガガッッ!!!!!!!!と音をたて空へ散布する。

実戦訓練終了だが俺は自分はまだアルトの性能に頼りきっていること
に苦悩していた。

実戦訓練パート2（後書き）

いやー戦闘シーンは難しいですね。

お弁当・・・ソレは悪夢の予感【その一】・・・そのいち!?(前書き)

お久しぶりです・・・ええすいませんともさ!(黙れ)・・・はい。

お弁当・・・ソレは悪夢の予感【その一】・・・そのいち!?

戦闘終了後に俺は気絶した山田先生を横に寝かせ起きるのを待つ、それから五分後に先生は目覚めソレを確認した俺は・・・。

「完敗です」

「へ・・・?」

山田先生に向かって敗北を宣言していた。

「へっ?・・・え?」

行き成りの発言に織斑先生以外の生徒は目を白黒させていた・・・
まあ勝ったのになんで敗北宣言してんの?といった心境だろう。

「なんでだよ?お前勝ったんだぞ」

困惑する一夏に俺はこう答える。

「違うぞ一夏、俺が勝ったのは偶然だ実力じゃない」

「へ？」

「先生は鈴とセシリアとの戦闘による疲労と集中力の低下及び初見の相手であること……そして」

此処が一番重要な点だ。

「そして？」

「……機体の……性能差……だ」

「あ……」

想助は悔しそうにその言葉を口にする、そう機体の性能差及び先生の疲労というハンデがありながらも想助は苦戦し最初から最後までアルトの性能に頼りつきりだった。

（先生は完全にリヴァイブの性能を引き出している……それなのに俺はアルトの性能の高さに頼りつきりで自分から引き出そうともしていなかった！）

そんな想助を見て織斑先生は分からない生徒達に説明する。

「そう、機体の性能差……それがあってもかかわらず南部は山田先生に苦戦した。それは機体の性能を自ら引き出す山田先生と違っ

て南部はISの性能を使っていたに過ぎない」

本来ある性能を操縦者が限界まで引き出す、それが乗り手の役目。頼るだけではただ単に座っているだけにすぎないのだと。

「ですから山田先生・・・俺の完敗です」

「あう・・・えっと」

珍しく落ち込み気味の想助にどの言葉をかけようかあたふたしていると干冬から助け船が入る。

「まあ自分が勝利したと驕らず、自分の悪い点にきずいた所には合格点をくれてやる。これからも励め、以上だ！」

「はっ！了解しました教か・・・（あ）」

織斑先生の指導に昔の訓練時代を思い出し、つい敬礼をしてしまう。

「・・・私はお前の教官になった覚えはないが」

睨んでる・・・それはもおスノゴイ目で。

「・・・すいません昔のクセで」

「昔のくせってな〜に〜そーちゃ〜ん？」

『昔のクセで』と言う言葉に食いついてきたのは以外にものほほんさんだった。

「ああ……軍にいたときのクセで……」

長い沈黙・
・
・
・
・
・

もしかして禁句だったのか？（わりと空気読めない人）

そして軍人騒動（発信源【南部想助】）は織斑先生の出席簿アタック（想助命名）により沈静化、一夏と一夏ラバーズに睨まれたのは自業自得であるからして『すま・・いえすいませんでした』と謝っておいたその後更衣室に移動。

【アリーナ更衣室】

「にしてもお前が軍人ね〜」

「【元】が抜けてるぞ一夏」

俺と一夏は教室に戻るため急いで更衣室へと向かい着替え始める、シャルルはとうとうすごい気迫で『先に教室に戻ってる』と言うので（いや、そこまで言っていないから【シャルル】）先に着替えている。

「なあ想助？なんで軍人辞めたんだ？」

「それは・・・」

少し考えこみ・・・。

「悪い一夏・・・今はいえない」

この回答にたどり着く、「なんで？」と言われると思っていたが意

外な答えが返ってきた。

「ふーんそっか、ならいいや!」

と、笑顔で答える一夏に目を丸くする。

「い．．．いいのか?」

「だって答えたくないんだろ?ならいいさ、それに．．」

「それに?」

「【今】は．．．答えられないんだろ?」

ニカツと人懐っこい笑みを浮かべる一夏に苦笑する。

そうだった一夏はこうゆうヤツだった．．．と。

「すまんな一夏．．．何時か必ず皆に話す、それまでまっしてくれ」

「おう!」

一夏は笑顔で俺は小さな．．．だが精一杯の笑顔で互いの拳を打ち付けあつ、これが友達．．．いや【親友】と言つのかもしれない。

「あっそうだ想助」

「なんだ？」

「この後皆で（私は皆でなど言っていないぞ【箒】）昼飯を屋上で食うんだけどお前も来るだろ？」

フム・・と少し考え。

「肯定だ」

「ちなみに弁当持参でな」

「尚肯定だ」

彼は知らない……この後の……あ・く・む・を。

「こんな終わり方ありか？」

「僕は……無しだと思う」

お弁当・・・ソレは悪夢の予感【その一】・・・そのいち!?(後書き)

遅くなって大変申し訳ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6145u/>

IS〔インフィニットストラトス・古き鉄の使い手〕

2011年10月26日13時00分発行